

### 1 自己評価及び第三者評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2890500164		
法人名	株式会社ファイブシーズヘルスケア		
事業所名	まんてん堂グループホームひょうご須佐野		
所在地	神戸市兵庫区明和通2丁目1番27号		
自己評価作成日	平成29年12月12日	評価結果市町村受理日	平成30年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉市民ネット・川西		
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104		
訪問調査日	平成30年1月7日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

楽しみのある毎日を過ごして頂くよう、レクリエーションを設け、他の入居者との交流ができる時間や朝・昼・食事前には体操を実施し、身体機能を維持できるように運動する時間を作っています。毎日が単調にならないよう、入居者様と相談しながらその日のプログラムを考えています。また、日本の文化や季節を感じられるよう夏祭り・敬老会・クリスマス会・初詣など季節行事を取り入れ、併設の小規模多機能と合同で実施しています。入居者の望まれていることを職員が聞き取り計画し、個別外出、個別対応にて実現する企画もあります。喫茶外出、動物とのふれあい、馴染みのスーパーへの買い物、書道やアートセラピーへの参加など、今までの生活での習慣が継続できるよう支援しています。

地域交流として、近隣のちびくろ保育園との交流会、館内で実施の音楽療法に地域皆様も招待し、交流できる機会を設け、イベントを通して施設の開放をしています。活動を通して入居者の笑顔が溢れる施設運営に力を入れています。

#### 【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設以来事業所理念を、利用者へのケアを通じて実践している。職員は利用者の笑顔を目標に、一人ひとりに丁寧に向き合うことを心がけている。利用者のクラブ活動の中で夢中で制作した自分の作品を前にして思わず出た笑顔、歩行リハビリを達成した時の笑顔など、利用者個々の好きなことや得意なことに職員も関わり、共に達成感を味わうことで、利用者との関係性がより深まってきている。又、近隣の保育園児との毎月の交流会も、利用者にとって待ち遠しいひと時である。頻繁に訪れる家族が多く、家族との交流が自然に生まれている。今後、利用者の重度化が進むことが予想され、管理者は、職員の主体性、専門性を育成できる環境、そのための体制強化を推し進めるために、今以上に研鑽に努めていく姿勢でいる。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

まんてん堂グループホームひょうご須佐野

評価機関名

特定非営利活動法人 福祉市民ネット・川西

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内に理念を掲示し、職員が入居者の満足向上に向き合えるよう実践している。また、理念の共有ができるよう申し送りや、カンファレンス等で入居者主体で話し合うようにしている。	会議や申し送り時等、ことあるごとに理念を振り返り、職員への周知を図っている。特に利用者の笑顔を引き出すことに力を入れ、利用者が輝いている表情を映した写真をまとめた「笑顔マップ」を作成した。経験ある職員が、まだ浅い職員を指導しつつ、相互に意識向上を目指している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の保育園と毎月交流会を実施し、顔なじみの関係を築いている。また、トライやるウィークの受け入れも積極的に行い、地域とのつながりを大切にしている。	恒例となっている毎月の保育園との交流は、利用者の楽しみとなっており、子どもたちから声を掛けられることもあり、利用者の喜びとなっている。事業所主催の夏まつりのバザーには多くの地域住民が訪れ、人気行事の一つとなっている。散歩ついでに行く近隣の店とも、馴染みの関係ができつつある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	夏祭りは地域の方にも参画して頂き、認知症高齢者と関わることで認知症の方への理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には入居者、家族、地域包括、地域の相談員、知見を有する方に参加頂き、ご意見をもらっている。改善を求められたことはすぐに対応し、ケア内容についても報告することで認知症や終末のケアの理解も深めている。	地域代表、地域包括、家族がメンバーである。毎回、利用者の様子だけでなく事故等についても報告し、意見交換をしている。地域代表者の欠席が多々あり、現在小規模多機能と合同で開催しているが、今後は、単独での開催やメンバーについても地域と調整していくことを検討している。比較家族的参加も多く、より活発な情報交換にしていきたいと管理者は考えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議等で運営や現場の情報を伝える機会を設けている。区役所にもケースの相談し、協力体制を築いていけるように努力している。	日常的に制度上の事務連絡や利用者個々の状況報告を行っている。地域包括とは、運営推進会議以外でも、積極的に情報交換に努め、協力関係を築くよう意識している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入社時に新人研修として身体拘束の内容を学び、身体拘束をしないケアを実践している。また、事故防止の検証や適切なケアが実践されているかを定期的に検証する機会を設けている。	神戸市によるビデオ研修以外にも、毎月の会議内で個々のケアの振り返りを通じて、適切なケアについての職員への周知及び意識統一に努めている。フロアの出入り口については、やむをえない場合のみロックを掛けることはあるが、職員は利用者の様子を察し、一緒に出るようにしている。玄関は安全上施錠している。	職員が見守りを強化できる時間帯を工夫することで、玄関を開錠できるよう継続して検討いただきたい。

自己	者 第三	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入社時には虐待研修を必須項目とし研修を受講している。危機管理委員会を立ち上げ、虐待に発展する恐れがないか検証している。 また、管理者自身も現場に行き、ケアを行っている職員に焦りが見えた時は、声をかけ落ち着きと取り戻すようにメンタル面のコントロールを行っている。	虐待を未然に防止するためにも、職員が余裕を持って業務に当たられるよう、管理者は普段から職員の疲労度に気をつけ、現場にこまめに入り声かけするように心がけている。利用者への言葉かけについては、接遇面を重視した研修から改めて学び、振り返る機会を設けている。		
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されている方がおられる。毎月の訪問時には現状の報告を行っている。 また、家族様で後見人を仕事として実施される方に講師を依頼し、運営推進会議にて研修を実施して頂く。職員、他の家族様の学びの場になった。	職員は、おおまかに制度内容を理解するとともに、具体例として活用している利用者を通じて、身近に感じている。運営推進会議で、活動している家族から活動状況を学び、より理解が深まった。		
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけ、説明を行う。また、加算の対象になった時点、重度化による費用負担の増加についても時間をかけ、書面にて説明を行っている。	契約時に、家族に事業所の方針を説明するとともに、家族の終末期に関する意向や考えを丁寧に聞き取るようにしている。この時点での応えを求めるのではなく、今後の心がまえや重度化した場合の対応等についても考えてもらうよう伝えている。家族の協力が必要であることを理解してもらっている。		
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議にて意見交換の時間を設け、意見・要望のご意見を頂く。会議で頂いた意見・要望は議事録にて対応内容を記載し、不参の方を含め、全員に配布している。また、意見箱の設置や家族様の来訪時に意見を頂くこともある。	家族からは、外出やリハビリ等の個別の要望が多くあがり、家族と相談しながら個々に対応している。普段の来訪も多く、その都度、時間を設け、日々の報告の他、相談を受けることもある。家族が気軽に話しができるよう職員から声かけするなど、コミュニケーションを心がけている。		
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員と管理者が対話する時間を設けている。面談室でゆっくりと話す時間、立ち話の中で気軽に相談できる時間など使い分け、職員の意見を聞きだす環境を作っている。会社の運営に関することは、管理者より本社に報告し、必要に応じて本社の職員が現場職員と話す機会を設けている。	管理者は、日常的に職員との意思疎通のための会話を大事にしている。職員個々に応じた話しやすい場や環境に配慮するとともに、職員の自発性、主体性を育成することを重視している。利用者のニーズに応じた介護の知識や技術等、福祉用具の活用について示唆することで、専門性を高めていきたいと考えている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事評価制度を行い、日々の働きを公平に評価できる環境を整えている。また、職員の能力や経験地に合わせた役割を作り、自身の力が発揮できる環境を整えている。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13			○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修も職員が学びたい研修内容を研修委員を中心に実施している。講師を職員が行うことで、伝える力も身に付けている。		
14			○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	兵庫区のグループホームの連絡会に参加し、情報交換を行い、悩んでいることを相談できる機会を設けている。また、得たことは事業所内で共有し、知識を深めている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面談時に、本人に要望を聞き基本状況だけでなく、わかりうる範囲で、アセスメントをとっている。日々の関わりの内容を本人に確認しながら行っている。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	訪問面談から、入居当日に繋がるまで、同じ職員が出向き、家族との関わりの中で、思いを伺い、不安なこと、要望を確認し、安心して入居ができるよう何度も話し合いを行う。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	1ヶ月間の当面の介護計画を作り、さまざまな側面から必要とされるサービスはないかを見極めている。本人、家族の要望も変化してくる為、入居1ヵ月後からより具体的なサービスを組み入れた介護計画書を作成している。		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	基本は、“共に暮らすこと”を前提とし、入居者と職員の関係を構築していく努力をしている。		
19			○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者、家族と一緒に参加できる行事を企画し、共に過ごす時間を大切にしている。家族にも家事等手伝い頂き、入居者を支える環境を作っている。		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個別外出の機会を設け、馴染みの喫茶店やスーパーへでかけている。友人・知人にも気軽に訪問してもらえるように声かけを行っている。	近隣の馴染みの店に買物に行ったり、家族が経営している喫茶店に他利用者も一緒にお茶を飲みに行くなど、気軽な交流の場となってきている。知人からの年賀状や海外に滞在している家族との電話のやりとり、行きつけの美容院への支援など、家族の協力を得ながら個々に応じた馴染みの関係を大事にしている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士が楽しく話しをされている時は、見守り、雰囲気や壊さないように努めている。入居者の人間関係が構築できるよう席配置を状況に合わせて変更し、孤独な環境にならないよう留意している。		
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了、他の施設・病院に行かれた際は情報提供し、環境の変化が最小限になるように支援している。また、終了後あっても介護相談を行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	まずは、“本人に話しをお聞きする”を心がけている。一人ひとりに直接話を伺い、計画作成担当者だけでなく、居室担当者にアセスメントを関わってもらい、職員全員が思いを聴けるよう努めている。	職員は、利用者のその日その日の体調や気分を察知し、目線を合せじっくり話しを聴くようにしている。利用者から笑いが出た出来事や喜びの表情を見せた時の話題や会話をきっかけに、思いを汲み取っている。利用者とのコミュニケーションを心がけ、信頼関係を築けるよう関わっている。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族から生活歴を聞き、現在の生活環境を考えている。習慣を継続できるように職員同士で話し合い、その方らしい生活を継続している。		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その方の体力や有する能力に合わせて一日の過ごし方を決めている。状況の変化があった場合は、フロア内の会議にて現状を把握し、プログラムの変更を話し合っている。		
26	(13)		○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画書の具体的なサービスを毎日実施できているか、夜に評価を行い、1ヶ月ごとに達成度をモニタリングを行っている。毎月フロア内の会議にて意見を出し合い、介護計画書は1ヶ月～6ヶ月内で現状に合わせた内容に変更している。	毎月、利用者の状態について担当者を中心に職員間で意見を出し合い、モニタリングを行う。その際、必要に応じてケア方針を見直す場合もあるが、基本は短期目標終了時や利用者の状態に変化のあった時に確認している。特に重要な3項目を抜粋し、利用者一人ひとりに丁寧なケアを心がけている。	日々の生活の中で安心、安全が優先されることはやむをえないが、より利用者の思いや意向が反映された介護計画を望みたい。
27			○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に記入すると共に、変化があった場合や普段とは違う行動がみられた場合は、朝・夕の申し送りにて職員間の情報交換を行っている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設の小規模多機能型ホームとの連携した行事や、書道クラブ、アートセラピー、希望の外出、個別支援など、ニーズに合わせたプログラムを提供している。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の地域資源を理解し、個別対応にて図書館や、郵便局、買い物等、ご本人の希望にて”その時”を逃がすことないよう努めている。		
30	(14) ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診による主治医の定期受診、訪問看護も毎週状況を把握と連携をとっている。 以前からの主治医が継続して往診している方や通院されている方がおられる。入居者、家族が希望するかかりつけ医を選択できる環境である。	殆どの利用者が事業所の協力医を主治医にしている一方、数名の利用者は従来からのかかりつけ医への受診を継続している。協力医は内科医と精神科医を兼ねており、定期的な往診と24時間の連携体制がとれている。毎週、訪問看護師による健康チェックと歯科の口腔ケアがあり、希望に応じ歯科医の往診も可能である。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週訪問看護師による健康チェックの実施。状況に応じて医師と連携し、指示ももらっている。また、健康管理の視点や観察方法を介護職員に指導し、変化に迅速に対応できている。		
32	(15) ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、現状の心身状況を病院に伝え、連携を図っている。 入院時の訪問(見舞い)や、家族と医師との話し合いの場(ムンテラ)に同席し、退院後の生活が安定するように支援している。	今年度、複数名の入院があった。約1か月程度の入院であったが、管理者や担当職員が見舞い、医療関係者や家族と情報共有しながら早期退院に努めた。退院前カンファレンスにも参加し、主治医と相談の上、退院後の支援計画を作成している。	
33	(16) ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化した場合の対応を説明している。元気なうちから、最期のときの対応を家族とも相談し、看取り介護が始まる時には希望に添えるサービスの提案を行っている。今年度は多く方の看取り介護を行い、その都度、家族の思い・考えを傾聴している。	事業所の指針に基づき、可能な医療体制と具体的な支援内容を契約時に説明し、同意を得ている。救急搬送時の延命措置に関する意向の確認も行っている。今年度も複数名の看取りを経験したことで、職員の看取り介護への想いと経験が深まった。	
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内研修にて緊急対応の勉強会を行っている。入社時のオリエンテーションに於いても、緊急対応マニュアルを作成し、指導をしている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防訓練を実施し、参加できなかったスタッフに対しては、個別に確認を行っている。夜間想定避難訓練を行うことで、冷静に行動できるスキルを身に付けている。備蓄も準備し、大きな災害にも対応ができるように日頃から用意している。	年2回の訓練の内、1回は夜間を想定した訓練を行い、夜勤職員の3名の連携方法について検討を重ねた。次回は、近隣の集合住宅との共同訓練をする方向で検討している。水害時対策として、防災備蓄食料の種類を増やした。備蓄食料の賞味期限が近づいたら、模擬体験として試食をする予定である。	近隣の住民との共同訓練によって、密な関係性が築けることに期待したい。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	記録用紙は必ず、他者に見られない場所で記入し、個人情報の保護に努めている。トイレ等のプライバシーの空間では、座位保持ができる方にはトイレの外で職員は待ち、何かあれば対応できるようにしている。	利用者への呼びかけには名字にさんを付け、同性の場合は家族の了承を得たうえで、下の名前を使っている。馴れからくる言葉の乱れには、職員でお互いに注意しあっている。浴室の脱衣場と廊下のドアの間に暖簾を下げることで、プライバシーにも配慮している。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望内容に応じて個別外出や個別対応を行なっている。可能な限り添えるよう努め、自己決定できるよう声かけを工夫している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝ゆっくり休みたい方は、2度寝、3度寝をされている。フロアで一日過ごすのではなく、その方の体力や習慣に合わせて過ごして頂いている。ご自身の趣味を楽しむ時間も大切にしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服をご自身で選んで頂き、お気に入りの化粧品等を使って頂いている。			
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	盛り付けや食器洗いを日頃は、関わって頂いている。月に2回、食事作りの日を設けて買い物から関わる支援をしている。誕生日には、ケーキ作りをしている。	各ユニットのキッチンで炊飯をし、委託会社から毎朝届く食材を一部調理したり、味付けをしたりして盛り付けている。元気な利用者には、自立支援の一環としてテーブル拭きや食器洗いを手伝ってもらっている。食事レク(手作り)の日の献立は、利用者から希望を聴き、ピザやパンバイキング、サンドイッチを作って楽しんでいる。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態はその方の嚥下状態に合わせた対応をしている。水分もお好みに合わせて提供し、1日に必要な水分量を確保している。片麻痺の方には、使いやすい食器を用意し、ご自身のペースで食べれるようにしている。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42			○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを行い、また訪問歯科による口腔内の清潔の保持や、個別にあった対応を医師と連携しながら実施している。		
43	(20)		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄のリズムを把握し、トイレ誘導が必要な方には、声かけをしてトイレでの排泄を行っている。	職員による誘導が必要な利用者もいるが、ほぼ全員がトイレで排泄している。夜間、トイレに起きる利用者や適時の誘導が必要な利用者など、個々に沿って対応している。必要な水分補給を主として午前中に行い、夜間はなるべく睡眠をとってもらうようにしている。	
44			○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量を確保し、体操や食事内容で腸が動くように促している。排便が出やすい時間にトイレに座り、習慣化されるように支援している。		
45	(21)		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個室、シャワー浴、機械浴等、本人の身体状況に合わせて、対応している。入浴を楽しんで頂くようゆず湯や、菖蒲湯等の季節を感じる特別浴も実施している。	1週間に3回、午前中の入浴を目安にしているが、利用者の状態と希望によって柔軟に対応している。重度の利用者には、併設事業所の機械浴を使用している。時には温泉の素を入れたり季節湯を楽しみ、湯上りには好みの保湿クリームを使っている利用者もいる。	
46			○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間はゆっくりと休めるように空調を整え、身体状況に合わせたベッドマットを使用している。日中に休息が必要な方にはお昼寝の時間を作っている。身体を動かす時間を設け、夜間の睡眠を促している。		
47			○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	心身状況に合わせて、薬を処方してもらっている。また用法や副作用については薬剤師より指導を受け、変化があった時は医療機関と連携を図っている。		
48			○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみ、食器洗い等主婦経験が長い方にはお手伝いを頂いている。書道やアートセラピー、写経など趣味を楽しみめる時間も作っている。		
49	(22)		○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の良い時期には、頻りに散歩に出かける。買い物の希望にも可能な限りスタッフ同行して出かけている。個別外出・個別支援を居室担当者が本人の希望を伺い、家族にも了解をとり、喫茶外出、外食、動物との触れ合いなど企画・実践している。	個別支援の一環として利用者ごとの希望を聴き、利用者一人若しくは少人数での外出を支援している。近隣のホームセンター、量販店、喫茶店、外食へと出掛けている。車椅子の利用者も一緒に紅葉や観桜ドライブへ出掛け、参加する家族の弁当も準備し、現地で家族と合流する企画もある。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は預からず、立替で買い物支援を行っている。個々の応じて、金銭額や使途を家族や行政機関等と相談・報告を行っている。		
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話が使える方は居室にて使用頂いている。手紙や電話が使用できるように支援している。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を味わえるよう四季折々の花や、貼り絵をしたり、飾り作りをしている。裏には、畑を作り、季節の野菜を作って収穫して楽しんで頂いている。エアコン、加湿器、空気清浄機で館内の温度・湿度を保ち、快適な空間を維持している。	明るいきりびんには大きなテーブルとゆったりとしたソファが置かれ、車椅子の利用者がゆっくりと通れる広さがある。事業所のテーマである「笑顔」という字が額装されて掲げられ、利用者の笑顔いっぱいの写真が貼られている。季節を感じるさりげない装飾、習字やアートセラピーでの作品が彩をそえている。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	階段のある場所は施錠しているが希望に応じて、ドアを開放し、自由に移動できるようにしている。フロア内にソファを置き、体を休めながらもレクリエーションに参加できる環境を整えている。		
54	(24)		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内については馴染みのものなどを置き、ご自分の好きな空間になるよう自由に使用して頂いている。	各居室の大きな文字の表札で、居室を間違わない様に配慮されている。室内には大型のクローゼットが準備されており、ベッドをレンタルしている利用者もいる。使い慣れた整理ダンス、家族の写真、誕生祝いの寄せ書き、ぬいぐるみ、仏壇などを持ち込み、利用者それぞれにとって居心地の良い空間となっている。	
55			○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの張り紙や居室の名前など、混乱されないようにわかりやすくしている。片麻痺の方が自分で欲しい物が取れるように環境を整えている。		